

デニス・ブリアコフ

ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団首席フルート奏者



祖国ウクライナに寄せる思いと 師“ウィップ”のこと (ウィリアム・ベネット)

クリミアに生まれ、モスクワで学び、ロンドンで世界に飛躍……

今は戦渦に揉まれるウクライナに生まれ、10代の大半をモスクワで学んだブリアコフ氏。
3年ぶりの日本ツアーで来日が実現した氏に祖国への思いを聞いた。

通訳：百目鬼英弘 撮影：岡崎正人 記事協賛：株式会社 グローバル

Denis Bouriakov

——ウクライナのクリミア半島ご出身なのですね。
ブリアコフ 10歳までクリミアで育ち、その後、ロシアで最高の音楽教育を受けられるモスクワ音楽院に入りました。

——クリミアで才能を見出されてモスクワへ？

ブリアコフ 最初はピアノを習い、8歳からフルートを遊びで始めたのですが、数ヶ月もしたらフルートの方が上手くなり、学校のコンクールで優勝したり、全クリミアの子供の音楽コンクールで2位に入ったりしました。父はすぐに私をクリミアの先生につけ、その先生から「クリミアを出て早く良い先生についての方がよい」とアドバイスされたんです。

ちなみに、モスクワ音楽院には小学1年から12年生までのクラスもあり、そこでは音楽のレッスン以外に普通科の授業も受けます。音楽のレッスンは大学と同じ先生が行う。こうした学校がモスクワの他にサンクトペテルブルグ、キエフ（氏はキエフと発音、オデッサにあり、ノボシビルスクにも似た学校があります）。

◆ クリミアとウクライナ

——クリミアにはロシア系の住民が多いと聞きますから、ウクライナよりもロシアとの結びつきが強い？

ブリアコフ その話はちよつと複雑になりますね。あまり語られませんが、クリミアは1953年までロシア（ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国）の一部でした。その後フルシチョフ首相がウクライナ（ウクライナ・ソビエト社会主義共和国）と協定を結び、クリミアをウクライナに譲る代わりに、ウクライナ東部をロシアに編入する領土交換を行った。地図上の見た目もその方がすっきりするという理由で（笑）。

しかしロシア人たちは今、この領土協定のことをすっかり忘れてしまっています。ロシアはクリミアを無償でウクライナに譲渡したのだから取り戻す権利がある、と思っている人が多い。でもこれは事実とは違います。

ロシア人たちは領土協定のことをすっかり忘れてしまっている。

Profile

1981年ウクライナのクリミア半島にあるシンフェロポリ生まれ。8歳からフルートを始め、10歳でモスクワ音楽院付属中央音楽学校に入学。早くから国内外の20ヶ国以上でソロ活動を行う。卒業後、17歳でイギリスに渡り、英国王立音楽院でウィリアム・ベネットに師事。2004年に同院を首席で卒業。その間、フィルハーモニア管、ロンドンフィル、フランクフルト放送響などで客演首席を務める。タンペレフィル、バルセロナ響首席を歴任した後、2009年にオロポリタン歌劇場管首席、2015年からロサンゼルスフィル首席。コンチエルティノー・ブラガ国際コンクール1位、ニールセン国際フルートコンクール2位、ランパル国際フルートコンクール2位、北京オーレル・ニコレ国際フルートコンクール2位、バーネット財団フルートコンクール1位などコンクールの入賞歴は数多い。ソロイストとして数多くのオーケストラと協演している他、世界各国でソロリサイタルを開催し、日本では2009年から2019年まで毎年リサイタルツアーを行い、今年6月にも3年ぶりの日本ツアーを行った。カリフォルニア大ロサンゼルス校教授、英国王立音楽院客員教授。使用楽器はアルタス「PS」モデル。

「出身地：ウクライナ」と書かれたブリアコフ氏のパスポート。現在はアメリカ国籍。両親は現在ロシアに住んでいるという。



——クリミアでは何語を話すのですか。

ブリアコフ 全員がロシア語を話し、新聞などもすべてロシア語です。私は小学校3年になって初めてウクライナ語を習いました。

ウクライナの東半分ではほとんどの人がロシア語を話し、西に行くに従って徐々にウクライナ語に移って行きます。以前はウクライナの首都キエフでも人々の大半はロシア語を話していました。昔は「ソ連」という一つの国でしたから、何語を話すかということにそれほどこだわりはなかったんです。

さらに遡れば、キエフは元はロシアの中心地でした。千年以上も昔のことです。

当時モスクワという町はまだ存在せず、サンクトペテルブルグに至ってはさらに新しく、300年程度の歴史しかありません。ロシアの文化の中心はウクライナにあり、そこから東に伝播して行っただけです。

こうしたことを考えると、今起きていることにはますます心が痛みます。同じDNAを持つ者どうしが戦っているのですからね。実際、私が23歳の時にDNAテストを受けたら、私の中にはポーランド、ロシア、ウクライナの3つのDNAが混じっていました。ただし誤解しないで頂きたいのは、だからと言ってウクライナやロシアに独自の文化が無いと言っているわけではありません。食

同じDNAを持つ者どうしが戦っていることには心が痛む。

べ物だって、同じボルシチでも母が作るボルシチはロシアのものとは味が違う。母のボルシチはもつとじっくり煮込み、味が濃いです。

——ロシアの軍事侵攻は今も続いています。事態をどうご覧になっていますか。

ブリアコフ ロシアのニュースを度々チェックしますが、白を黒に、黒を白にとすべてが逆さまに伝えられているのを見るとゾッとしますね。強力なプロパガンダの威力でしょう。ウクライナはネオナチに支配されているなどと騒いでいるけれども、ネオナチなんて、いても微々たる存在で、ウクライナ国軍が牛耳られている事実もない。ひどい話です。

——ロシアに音楽家のご友人も多いと思います。プーチンとの関係で西側のすべてのポジションを失ったゲルギエフさんとも親しかったと思いますか。

ブリアコフ 誰とは言いませんが、戦争にはみんな反対の感情を抱いていますよ。ゲルギエフだけは例外で、彼をもう友人と呼ぶことは、私は出来ません。私は彼の指揮で演奏しましたが、音楽家としてのゲルギエフを尊敬しこそすれ、彼の政治的なスタンスはとても認められるものではありません。

——今はアメリカ国籍ですか？

ブリアコフ ええ（と言ってパスポートを取り出す）。パスポートに出生地が「ウクライナ」と書かれているのが、せめてもの慰めです。

◆ウィツブの音に身体中電気が走った

——話題を変えます。ブリアコフさんの師匠だったウィリアム・ベネットさんが5月11日に亡くなりました。改めてベネットさんと出会った時のお話を聞かせて下さい。

ブリアコフ ロンドンで彼に習い始めたのは17歳の時ですが、彼とのつながり自体は14歳の時からありました。その前年、私はスイスのジュネームス・ゴールウェイのサマースクールを受講し、その時のビデオをゴールウェイがウィツブ（ベネットの愛称）に見せ、興味を持ったウィツブが私に「ロンドンに来て勉強しないか」とコンタクトして来ました。しかし父は反対だった。そんな歳の子供が一人でロンドンに行くのは危険すぎると。もちろん父が仕事

Denis Bourriakov

をやめて私と一緒にロンドンに行くことも出来ない。それで17歳で音楽院を出たあと、単身ロンドンに渡りました。

—— ベネットの最初のレッスンで一番印象に残っていることは？

ブリアコフ 最初はとにかく英語が分からなかった。最初のウォームアップクラスで彼が何を言っているのか分からず、これからの1週間は長いだろうなと思っていたら、彼が楽器を取り出して吹いてみせたんです。あの時の、身体中を電気が走ったような衝撃は決して忘れません。それまで聴いたことがないような音でした。部屋いっぱい美しく丸い音が響きわたった。自分と同じ楽器の音だとはとても思えませんでした。

教え方もロシアとは全く違いました。いつも「もつと楽しんで吹け！」と。ロシアでは常に元気を求められ、いつも真面目くさったような演奏をしていた。ウィップは全く逆でした。演奏を楽しみ、いつもイメージをもって吹けと。

◆ アルタスとベネットスケール

—— 楽器も変えたのですか？

ブリアコフ ウィップに習い始めて3ヶ月くらいしたとき「楽器を変えた方がいい」と言われましたが、買えるお金がなかったんです。そう言ったら「私の楽器を貸してあげる。ただしオープンG#の楽器だよ」と。

彼が貸してくれた楽器は、今私が使っているのと同じアルタスPSモデルのプロトタイプでした。その楽器はアルタスの開発者・田中修一さんがドイツ向けに445のピッチで作ったもので、管の長さが若干短く、ピッチが高かった。ウィップは、その楽器を吹くと自分のピッチがすごく低く感じられるのを嫌がり、自分でトーンホールをあちこち動かしたり埋めたりして440か441に改造していた。私とその楽器を借りたのは2000年。以来、2009年まで使い続けました。メトロポリタン歌劇場に入った時もその楽器でした。

—— オープンG#の楽器で？

ブリアコフ そう、今でも私のアルタスはオープンG#ですよ。

—— ベネットがアルタスに果たした最も大きな貢献は何だと思えますか？

ブリアコフ やはりスケールの改良です。「ウィリアム・ベネット・

スケール」と呼ばれるもの。

ウィップはアルバート・クーパーのスケールからスタート

し、それでもBの音は低めで、C#は上ずるといふ問題を何とかしたいと考えていた。そ

こで、左手の親指のトーンホールを大きくし、C#を低くするために音孔を小さくするなど、いろいろに調整しました。そうやって完成させたのがベネット・スケールです。私は現在のフルートでベストのスケールだと思っています。もちろんパーフェクトな楽器などありません。音程は必ずどこかで妥協しなければいけない。でも私にはウィップのスケールが一番しっくりきます。

他の楽器だといろいろ調節しながら吹かないといけない。

田中さんはウィップの要望

を科学的に分析してアルタス・フルートの管体を作り、二人は何年もかけてこのスケールを完成させました。おかげでアルタス・フルートでは、他のどのフルートよりも正しい倍音と音のセンターを得ることが出来ます。

—— 正しい倍音でフルートを響かせる練習の大切さもベネットは強調しましたね。

ブリアコフ ええ。よく誤解されますが、倍音練習とは言っても、

初めてベネットの音を生で聴き体中を電気が走ったような衝撃を受けた。



2009年から2019年まで毎年日本でリサイタルツアーを行って来ただけに大の日本通。



楽器はアルタスの「PS」モデル。ベネットに師事した直後からオープンG#システムを愛用するが、8歳でフルートを始めた時もジャーマンシステムのオープンG#の楽器だったという。

アルタスのベネット・スケールは
ベストのスケールだと思っている。

倍音を出すだけの練習ではありません。フルートでは息の角度が変わると音程が変わりますが、もし基音が上ずっていると、オクターブ上の倍音は低くなる。逆に、下を低く吹くと、オクターブ上の倍音は高くなる（と言って吹いてみせる）。この倍音関係が正しくないとサウンドも美しくなく、耳に心地よく響きません。きちんと音のセンターを捕らえた息の角度とスピードだと、オクターブ上の音程もよく、サウンド全体が丸く美しく響きます。

——ベネットに習う学生は最初、拍子（拍節）の重要性も叩き込まれるそうですね。日本人などくに。

ブリアコフ 確かにそれはよく言われました。子供時代に教えられながら、大人になって忘れがちになる問題だと。もちろん拍節の感じ方は時代や音楽によって異なりますが、通常、音楽はダウンビートにより多くの重心がかかります。

しかし、言語によってもその感じ方は違います。フランスの音楽ではそれほどダウンビートを強調しません。フランス語では最後のシラブルが強調されがちで、そうしたことがフレーズの最後の音の扱い方にも現れる。それは自然なことです。

日本語を少し習い始めましたが、日本語には強弱の違いがほとんどありませんよね。ヨーロッパ言語のようなアクセントがありません。水平的に聞こえる演奏をする日本人がいるとしたら、そうした日本語の影響が大きいのかも知れない。

——ロシアの音楽はどうですか？

ブリアコフ ヨーロッパの他の国と違いはありません。「ロシア音楽を一番理解できるのはロシア人だ」という人がいるけれど、私は賛同しない。なぜなら、プロコフィエフのソナタで私が受けたベストのレッスンはウィップのレッスンでしたからね。

◆ タファネルは思い出の曲

——3年ぶりの日本ツアーになりましたが、今回のプログラムで特に思い入れのある曲目は？

Denis Bourriakov



アルタス「PS」モデルのオープンG#システム仕様。
G#の音孔が裏側にない。

オープンG#が音響的に優れているのは もちろん、運指の可能性も拡がる。

ブリアコフ 2020年と21年の2度もパネデミックの影響で日本ツアーがキャンセルされ、今回はその時に予定していたプログラムを組みました。タファネルの「魔弾の射手による幻想曲」は、私が12歳の時にオープンG#の楽器からクロースドG#の楽器に変えた時に習った曲です。

——ということはオープンG#の楽器でフルートを始めた？

ブリアコフ ジャーマンシステムのオープンG#の楽器で始めたんです。オフセットのカバードキーで、親指キーのC、Bbが逆だった。12歳の時にインラインのクロースドG#のフルートに変えたのですが、慣れるまでに3ヶ月かかりました。そのとき、楽器を変えて最初に勉強したのがこの曲です。ウィップに習い始めてまたオープンG#に戻ったわけですが、すでに経験があったので2週間程度で慣れました。

タファネルはウィップの所でもたくさん勉強しました。その度に「悪いクセがまだ残っている」といわれた。以来、この曲はずっと練習していませんでした。オペラ（メトロポリタン歌劇場）で原曲に触れたりして以前とは違う解釈で演奏できると思うようになったんです。

ワックスマンの「ヴァイオリンとピアノのためのカルメン幻想曲」はとても技巧的な曲で、自身の編曲です。コンサートで演奏するのは今回が初めて。この曲ではより洗練された演奏を目指し、自分自身をいろいろ探究できる面白さを感じます。

——お使いのアルタス「PS」モデルの魅力は何ですか。

ブリアコフ 音の深さですね。ダークサウンドでより深い音が出ます。アルタス「AL」も素晴らしいモデルですが、私にとっては「PS」モデルの方が自分が望む音が出せると感じます。



楽器は非常にパーソナルなもので、そうした相性は人によって全然違います。
——オープンG#の楽器はお弟子さんにも勧めますか。

ブリアコフ オープンG#の方が余計な音孔がなく、Eメカも必要ないため、音響的に優れていることは疑いありません。指使いの可能性もより多くあることを、私は生徒たちにいつも説いています。その点、アルタスフルートが入門モデルから高級機種まで全ての品番でオープンG#フルートを製作し、日本のアルタスフルート販売元のグローバルが常時それらを在庫していることは、とても素晴らしいと思います。他のメーカーの場合は特注しないと手に入りません。どのメーカーも普通にオープンG#モデルを作る時代がくるといいですね。

でも、もしかすると自分に合った楽器を探しているような段階でオープンG#を勧めるのはまだ早いかもしれない。オープンG#に変える選択肢は、その本当の魅力が理解できた時に生まれてくるでしょう。その意味でオープンG#は最後の選択と言っても良いですね。

3年ぶりの日本ツアーとなった今回は6月に松本、京都、金沢、東京、高崎でリサイタルを行った。プログラムはF.ワックスマン（ブリアコフ編）「ヴァイオリンとピアノのためのカルメン幻想曲」、ムーケ「パンの笛」、タファネル「魔弾の射手による幻想曲」、カゼッラ「シリエンヌとブルレスク」他。ピアノは石橋尚子氏。